

ばかり、ばっかり

大松 達知

ばかり、が苦手。

そのむかしカップヌードルを食べていると、母親に「そんなものばかり食べてちゃだめよ」とくりかえし言われた。親としては目の前に嬉々として即席麺を食べる息子がいて、ひとこと言いたくなつたのだから。しかし、明確な根拠を示して否定できるわけではない。ふとした新時代の食習慣への懸念があり、それが苛立ちに変化して「ばかり」発言になつたに違いない、と分析している。

日清カップヌードルは今年で発売五十周年。幼少期に食べ慣れなかつた世代は、簡便で美味な（個人の感想です）この商品を恐れ嫉妬したのだから。冷凍食品が、その出始めのころは偏見にさらされていたのと似ている。

さて、この「ばかり」は辞書的な意味の一つ目（そのもの一つに限定する。だけ、のみ。）に当たる。

しかし、「カップヌードルばかり」の（ばかり）は、（多くは「ばっかり！」に変化して）、ニュアンス的には、日

常的にことあるごとに繰り返している！という非難の気持ち加わる。いわゆる上から目線。ビールばかり飲んでる本ばかり読んでいる、のように。そもそも「だけ」では済まない嫌味な心理を加えたいから「ばっかり」と言うのだ。「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。」と『坊っちゃん』冒頭にはあるなあ。

こういう語義の分類は、外国語として日本語を教えるときには体系的に解説するはず。一般的ないギリス人よりも、日本の英語教師の方が英文法の解説には長けていると言われる。少し離れてその言語を見るからだ。

赤いものばかりを私にくれる父三歳のときから変わつていない
前田康子『色水』

女の子は赤が好きという思い込み。一般の枠からはみ出ないで欲しいと願う親心（イコール束縛）。それが世の父親に赤を選ばせる。その親心がずっと続くことに呆れつつ、立場が親より上になつてきた心理を描く。

まず先に支柱ばかりが立っているきゅうり畑よ 通勤が好き
工藤玲音『水中で口笛』

栽培者の手際の良さに驚きつつ不自然さも感じているのか。ただの限定にないクセが臭うのが「ばかり」。

と、妻が娘に「ゲームばかりやってちゃだめよ」と言っている。娘は「ばかりやってないよ、YouTubeだって見てるし！」と反論して。うふふふ。